



TITLE:

清太宗實錄の初修開始年次と攝政王勅論

AUTHOR(S):

今西, 春秋

CITATION:

今西, 春秋. 清太宗實錄の初修開始年次と攝政王勅論. 東洋史研究 1936, 2(1): 59-64

ISSUE DATE:

1936-10-13

URL:

<https://doi.org/10.14989/145571>

RIGHT:

清太宗實錄の初修開始年次と攝政王勅諭

今 西 春 秋

一

清の太宗實錄は順治、康熙、乾隆の三度修められた。そのうち康熙、乾隆の纂修年に就いては問題はないが、順治初纂に關しては、開始終了共に其の年次が明瞭でない。こゝには其の初修開始の年次を問題とした。

世祖實錄（康熙修）に據ると、太宗實錄は順治六年と同九年との二度、編纂が開始せられたことになつてゐて、何れを採る可きか甚だ判定し兼ねるものがある。曩に私は史料第二十卷三、四號誌上に掲載した「清三朝實錄の纂修」と題する卑說中に、この問題を採り上げて大體次の様に論述した。即ち

太宗實錄の兩次起纂に關しては、世祖實錄他清史稿列傳、清史列傳等に相當多數の記錄が見られるけれど

も、後二者のそれは實錄の記載を分割案配したるものに過ぎず、實錄中に見えるものは、相互全然別個獨立した記載であつて、兩次の編纂開始に就いては何等の關係も辿り得ない。そこで考へられることは、順治六年第一回編纂時の總裁官として擧げられてゐる剛林、祁允格等が順治八年睿親王多爾袞の叛逆事件に坐して罪せられてゐることであるが、然し單にそれだけの理由のみで以て改めて第二次の纂修が起されたとも思はれない。殊に第一回の總裁官の多くが、又第二回の總裁官たるに於てをやである。

然らばこの間の顛末を如何に解す可きかといふに、私は徐中舒氏が「內閣檔案之由來及其整理」（明清史料第一編卷頭所載）といふ一篇中に、「太宗實錄は順治六年に復修せられた。其のことは現在歷史博物館に存する

攝政王勅諭に見えてゐる。」と記してゐることを注意し度い。このことは一見して、太宗實錄の兩次起草に加えて、更に順治六年の復修といふ記録を加へ、一層紛雜したかに思はれる。が然し、私はこの勅諭の中に見える太宗實錄なるものが、實は眞に實錄を稱し得べきものではなかつたと考へる。今攝政王の勅諭といふのが如何なるものか、その文面を知り得ないのは遺憾であるが、こゝに太宗實錄とあるものは、實は世祖實錄順治八年二月の條に記載された剛林罪狀中の一案に、「剛林は又盛京所錄の太宗史冊を將つて在々改抹した云々」とある、その太宗史冊なるものに相當すると思案される。而して世祖實錄順治六年の條に見える太宗實錄と稱するものも矢張りこの太宗史冊を以て呼べる可きものと考へる。太宗史冊の性質は分明でないけれども、盛京時の記録であると言へば、先づは現在の所謂滿文老檔であらう。滿文老檔を以て實錄と稱することの別段不思議でないことは已に之を述べた。而して順治六年にこの滿文老檔即ち太宗史冊なるものゝ整理に着手したのである。世祖實錄に太宗實錄纂修といひ、攝政王勅諭に太宗實錄復修といふとも、這種記録の整

理を指して言つた場合には、何れも該當せしめ得べき言葉とせられよう。つまるところ、實際の太宗實錄が纂修し始められたのは順治九年と見られなければならぬ。

と。以上私の論旨である。

然る所先般、右に見得ないのを遺憾とする旨記した攝政王勅諭なるものゝ寫眞を入手し得た。更めて本寫眞を閲するに及んで、徐中舒氏の記す所が洵に事實に相違してゐること、従つて之に依據した私の論述も當然變更せられなければならないものであることを知つた。

本寫眞の撮影に就いては、鴛淵一先生始め、濱一衛、周作人、裘子元諸氏の御厚意に深甚の謝意を表するものである。

二

先づ私はこゝに、攝政王勅諭なるものゝ全文（漢文對譯滿文は之を除く）と、併せてその寫眞とを掲出しなければならぬ。勅諭に曰く、

皇父攝政王勅諭內翰林國史院掌院事大學士剛林。茲者恭修太宗文皇帝實錄。擇於順治六年正月初八日開館。

予惟帝王撫運膺圖。綏猷建極有一代之興。必垂一代之

史。以觀揚於後世。誠要務

也。我太宗文皇帝安內攘

外。在位十有七年。其武功

之盛。及號令賞罰。訓誥宣

布。爾等俱稽實成編。母誇

以失實。母偏以廢公。母忽

以致遺。母怠以玩歲。祇勤

夙夜。以亟成一代之典。稱

予意焉。欽哉。

就いて見らるゝ如く、此の

勅諭中太宗實錄の復修に關し

て言及するものゝ如きは毫も

見られない。たゞ單に太宗實

錄の纂修を命じたに過ぎない

ものであることは明々白々で

ある。徐氏の本勅諭を以て、

太宗實錄の復修を記すもので

あるなどゝしたことは、勝手

な解釋を施したものと云ふ他ないが、かゝる解釋に到つ

たことに就いては、思ふに、天聰六年の楊方輿の條陳時
事疏中の

我金國雖有榜什在書房中。日記皆係金字而無漢字。皇

上即爲金漢主。豈所行之事。止可令金人知。不可令漢

人知耶。……乞選實學博覽之儒。公同榜什將金字翻成

漢字。使金漢書共傳。使金漢書共傳使金漢人共知千萬

世後知先汗創業之艱難。皇上續統之勞苦。凡仁心善

政。一開瞭然。誰敢埋沒也。

とある一條を以て

據此疎可見。滿文老檔爲開國期唯一官撰記錄。譯本似

即着手於此時。

と速斷したことにその原因があらう。徐氏は前上疏のあ

つた天聰六年に、太宗實錄の漢譯は開始されたと考へ

た。従つて順治六年の攝政王勅諭は、之を以て復修時の

勅諭と推考する他なかつたのである。つまり徐氏によれば、

太宗實錄の漢本文は已に太宗生時に編纂に着手され

たことになる。太宗の生存中から太宗の實錄の編纂を開

始するなどといふことは原則としては有り得ない。太宗

の生存時から已に用意されつゝあつた起居注若くは日曆

の類ひの記録が、(そしてその漢譯が天聰六年から開始さ

れた——）太宗の死後、其儘實錄となつたといふことならば、有り得るかも知れないが、然しそれは今の所、證據のない臆測を試みて見るだけのことに過ぎない。楊方興の上疏によつて滿文老檔の漢譯本が作られることになり、而してそれが後に實錄の根幹をなすものとなつたとしても、然しそれはそれだけのことに止り、上述天聰六年の攝政王勅諭を以て、太宗實錄の再修を言ふものとすることは斷じて出来ない。何處迄も此の勅諭は單に實錄の編纂を命じたものであり、復修を命じ、或ひは復修のことに言及關聯したものであり得ない。而してそれは當然である。順治六年にして已にその復修を命ずる程、太宗實錄の初纂が疾く出來上つてゐたとは、彼の入關早々の形勢中に、殆んど考へ能はぬ所である。

茲に於てか私は、曩に史林誌上に掲げた所の前記所論を撤回しなければならぬ。私は世祖實錄に見える順治六年、同九年の太宗實錄纂修記事、それに徐氏の傳ふる順治六年の復修記事、此の三個の記事のなめらかな解釋に苦しんだ揚句は、右攝政王勅諭に見える太宗實錄といふのは其の實、太宗史冊を以て呼ばる可きものである。世祖實錄順治六年の條に見える太宗實錄といふのも、矢張

り之を指すものだとしたこと前記の如くである。然しかういふ解釋の必要はなくなつたかに思はれる。實錄並びに勅諭の文字面に表はれた通り、之を實際の太宗實錄纂修に關する記録と見てよい。

然らば、順治六年、同九年の二回に互る纂修下令は何したとかであるが、これに就いて私は、上掲の勅諭寫眞に注意すべきものを見る。それはこのものが、勅諭として全然體を成さぬことである。漢文の終りにも、又滿文の終りにも、全く日付けの記入が無い。日付けの下部に押捺さる可き最も重要な印璽が無い。謂はゞ正式の勅諭として發令されたものではない。

されば思ふに、順治六年正月太宗實錄の纂修は已に發令を見るまでに準備され乍ら、其の間何ものか已み難い事情の生ずるあつて、遂に正式下令のことは沙汰止みに終つたものではあるまいかと。如何なる事情の生じたものであるかは不明ながら——。世祖實錄、順治六、九年の二條に太宗實錄纂修の記事はあると言つても、前者は、後者の數十行首尾整へるに較べて、極めて簡單に僅一行、

纂修太宗文皇帝實錄。命大學士范文程。剛林。祁充格

洪承疇。馮銓。寧完我權充總裁官。

とあるに過ぎない。片々薄弱なる史料の偶然迷れ込んで成つたといふ感じが深い。

處で又考へられることは、前にも一度考へた所の、剛林罪案の一條に就いてある。世祖實錄に據れば、范文程、剛林、祁充格などゝ列擧されてゐるけれ共勅諭には剛林のみ見え、順治六年太宗實錄編纂の準備に於いて剛林の召めた地位の最も重かつたことは想像に難くない。剛林が修史の才幹卓越してゐたことは、清史稿の其傳にも見られる。順治八年、彼が伏罪の原因となつた太祖實錄並びに太宗史冊改抹の件の中にも、彼が修史に於いて携はる所の重かつたことが、伺はれるがこの事件について彼が罪狀として擧げられた一案の中に、(世祖實錄、順治八年二月の條)

又將盛京所錄太宗史冊在々改抹一案。訊之剛林。據云。纂修之時。遇應增者增。應減者減。刪改是實。舊稿尙存。云々

といふものゝあることは、史林誌上でも述べた。處でこの一案によれば、剛林が順治八年二月以前の時に於いて、太宗史冊なるものに手を入れてゐたことは事實と見

做される。太宗史冊と稱するものは、恐らく實錄の根幹を成すものであらうと想像される。とすると太宗實錄編纂のことは矢張り彼を主位として順治六年以後、開始進捗されてゐたものではないか、それが剛林等伏罪のことありしに由り、改めて順治九年の纂修下命となつたものではないか、と今一度最初に出した處の疑問に立ち返つて考へられぬではない。前には、右の様な理由で以て、第二回の纂修が起されることは考へられない様に述べたけれ共、剛林のことをよく考へて見ると決してかうしたことは有り得ないことでない。

然し、といつて矢張り私は順治六年に編纂が開始せられたといふ風には考へない。攝政王勅諭なるものが、その體を具へてゐない點を考へて見れば、依然、順治六年の發令は、そのこと無くして止んだ、つまり太宗實錄の編纂は順治九年を以て開始されたと考へる方が順當だらうと思ふ。但し正式の發令がなかつたからとて、實錄編纂に關する事務が全く無かつたと云ふのではない。剛林罪案に見れば、而して一度びは發令されるばかりになつたことを考へれば、假令ひ正式の發令は無かつたにしても、そこばくの編纂事務、編纂準備といつた程のもの

